

3 企画制作研修 C: インドタウンのコミュニティミュージック

1 概要

本アートマネジメント人材育成事業（令和4～令和6年度）は、①フィールドからまなぶ（2022）、②フィールドとともにつくる（2023）、③フィールドと地域をつなぐ（2024）の内容で構成されました。

令和6年度の企画制作研修（以後、「研修」）3本の中で、本研修Cでは、在日移民社会と多様性に関連する社会課題を、音楽と言語の観点から扱いました。

研修Cは、令和4年度実践セミナーにおける「留学先D：インドタウン」とその関連企画「インドとふれあう街歩き」（東京都江戸川区）、令和5年度実践セミナー「芸能体験講座2：南インド古典舞踊モヒニアタムの体験－ダンスでインドの神々になろう！」（81-83頁参照）、およびこれらを基にして行った研修C「日本とインドをつなぐ言葉とリズムーともに生きるための新しい音楽コミュニティづくり」と連続するものです。

継続的に参加した受講生に加え、本年度には新たに江戸川区および近隣に住むインドルーツの方々、インド文化そのものに興味を持つ音楽教員や本学学生が参加しました。

本年度の講師は、以下の方々でした（敬称略、五十音順）。①伊賀並公佳：作曲家および即興音楽演奏家として、CM音楽やゲーム音楽を手がけ、インド音楽の研究に基づく現代音楽作品も発表。本研修のファシリテーター。②指原一登：インドの太鼓（タブラー・バーヤーン）をインドで学び、江戸川区などで日本人やインド人の若者に伝統音楽として教授。③原豊：江戸川区内2つの日本語教室で日本語学習支援を行い、インド、パキスタン、イラン、ベトナム、フィリピン、中国出身者へ日本語を教授。加えて、コーディネーターと

して、江戸川印度文化センター（EICC）所長ヨゲンドラ・プラニク氏（令和4～令和6年度）や、一般社団法人国際交流エドガワ（橋田妙子代表、令和6年度）にもご協力いただきました¹⁾。また過年度の講座講師、インド舞踊家シュラッド・パティル氏（令和4年度実践セミナー）、丸橋広実氏（令和4および令和5年度実践セミナー）の講座も、継続受講生への貴重なインプットでした。事業スタッフである本学教員のスケジュールリングの遅延にもかかわらず、素晴らしい研修を行っていただいた講師、コーディネーターの方々に、この場を借りて謝意を表します。この他、煩雑な事務を担当した佐々木可奈子事務員、イベント実施および記録作成を担当した本事業特任研究員鈴木良枝氏と三好美穂氏、および本学博士後期課程のFeng Chenyueer氏にも助けていただきました。

一般参加者として、日本語ボランティア、インドルーツの方々に参加いただきました。

本年度の目標は、前年度の研修Cで発見した、インドルーツの方々の日本語学習の課題に対して、1つの具体案を提示することでした。つまり、日本語学習におけるオノマトペ（擬態語・擬声語）の利用を促進するための音楽を、いっしょにつくるワークショップ（以下、「WS」）の開発でした。

日本人とインドルーツの方々の両者が音楽づくりWSを通じて相互理解を深め、日本語教授者には新しい教授方法開発への気づきを、また日本語学習者には、よりよい日本語運用能力をもたらすことを目指しました。終わってみると、WSにて両文化の人々が1つの場所を共有し、情報を交換し、直接に対話することがどれだけ貴重なことかを実感することになりました。

外国ルーツの方々を単なる「労働者」としてで

はなく「生活者」、「市民」、「隣人」として日本社会に迎えるためには、本来は、基礎自治体や国による語学教育支援、移住者家族たちへの教育支援制度の整備が必要です。現状では、こうした取り組みはまだその端緒についたばかりです。本企画の実施が、インドルーツの方々や日本語教授者、およびその関係団体、関係者に前向きな効果ができることを期待します。将来、外国ルーツの方々や真の隣人となり、ともに未来の新しい日本社会を生み出す力になることも期待したいと思います。

2 本年度企画の位置付け

前々年度（令和6）の諸企画や前年度（令和5）研修Cでは、「フィールドとともに作る」ための現場として、江戸川区葛西地区（東京のリトルインド）に着目しました。ここにはインドルーツの人々が集住し²⁾、その伝統音楽・芸能も存在します。また、日本語教室を運営する日本語ボランティアの方々が多くおられることも、受講生とともに学びました。その観察から、日本語とインドの言葉をつなぐ要素の1つにオノマトペの存在があることに気付かされました。

最終（令和6）年度の研修Cでは、「各地における異文化コミュニティとの共生と包摂についても取り組む（中略）当該コミュニティの伝統音楽・芸能はそれらの課題解決に資するという点においても重要³⁾」との認識の下、前年度のWSの成果を地域につなぐことを目指しました。2024年10月には、区立の江戸川区多文化共生センターが開所され、「多文化共生のまちづくりを推進するため、多言語による生活相談、日本語教室、交流イベントを開催します」と謳っています。行政としても、多文化共生の推進に重きを置いているように見えます。こうした状況を起点としながら、地域に存在するインド音楽、日本伝統音楽と言葉をつないだWSを構想しました。

3 本年度の活動

研修C「インドタウンのコミュニティミュー

ジック2024」は、次の4つのWSで構成しました。つまり、「①コミュニティを知る」、「②コミュニティミュージックの制作－1：インドのことばと日本のことば」、「③コミュニティミュージックの制作－2：日本とインドをつなぐ言葉と音楽」、最後に、「④コミュニティミュージックについて：ふりかえりと今後の展望」です。

■第1回WS [2024年9月29日(日),EICC]

受講生、インドルーツの方、日本語ボランティアで日本語の学びとオノマトペについて話し合い、次のような諸点が抽出されました。

- ①一般的な日本語教授法では、オノマトペを積極的に教えない。これにより、生活における日本人の会話が理解しにくくなる。加えて、医療現場での症状の訴え（頭がズキズキする、胃がシクシク痛む、など）や、会話中の感情表現（ニコニコする、など）は、初期の段階から理解できれば、会話促進が可能
- ②イラストなど、視覚的情報を援用してオノマトペの理解を進めることが有用
- ③オノマトペの音楽(リズム)的要素に着目すると、音を媒介としたオノマトペの学習促進が可能
興味深いことに、タミル語母語のインドルーツの参加者からは、日本語とタミル語には多くの同じ（近似の）オノマトペがあるとの情報がありました。前年度WSの成果に追加できる、貴重な情報でした。

■第2回WS [2024年10月19日(土),EICC]

コミュニティミュージックの制作の第1回目です。区内で日本語ボランティアの活動を行う



写真1 第1回WSの様子

方々、インドルーツの方および受講生が、改めて、日本語とインドの言葉のオノマトペを利用したWSの構築方法について情報交換しました。新たにインド音楽を習った経験もある作曲家の参加者、日本文化（茶道や箏曲）の紹介事業を行う国際交流エドガワのメンバーの新たな参加もあり、復習的に日本語とインドの言葉（タミル語）を比較しました。

その中で、次のようなWS案が創り出されました。

①イラストを使って動物の鳴き声（ニャーニャーなど）、人の感情（ワクワクなど）、自然の事象（水がポタポタなど）を示しながら、リズム楽器を鳴らしてオノマトペを音楽にする。これにタブラーで基本リズムを打ち、全体にゲーム性を導入

②WS対象者は、日本語学習者（インドルーツの子どもや保護者）

タミル語では、書きことばと話しことばの差が大きいことも指摘されました。標準的なオノマトペを逸脱した、地域による偏差や個人により創作されるオノマトペも、WSに取り入れることも提案されました。

■第3回WS [2024年11月30日(土),音ラク空間]

第2回のディスカッションを経て、実際の音楽WSを実施しました。今回、新たに演奏者として参加された江戸川区在住の三味線奏者田中奈央氏が、日本の旋律要素を追加してくださいました。インドルーツの親子、区内在住のクリエイターの方などの参加もあり、投影したイラストや楽譜も使いながら、楽しいWSとなりました(写真2)。

当日の進行は、以下でした。

①インドルーツの方が動物の鳴き声の日本語オノマトペを使って用意した詩を利用して、日本語とタミル語のオノマトペを紹介。次には前奏を付けて、一連の音楽的展開を図った。

②詩で表されたストーリーに前奏を付け、動物の鳴き声オノマトペにより音楽遊びを行った。

母語はマラヤーラム語だが公立小学校に通学

して日本人の友人もいるという9歳の男子とタミル語母語の女性とともに、イラストで表示された鳴き声オノマトペをプレゼンし三味線で模倣した。

③水のさまざまな様子を表す日印両語のオノマトペを利用した音楽の創作（譜例1）

例：雨がポツポツ [日本語 Jpn]（ポスポス [タミル語 Tam]）、雨がピタピタ [Jpn]（ポスポス [Tam]）、ザーザー [Jpn]（トプトブ [Tam]）降り、その後に水がサラサラ [Jpn]（サラサラ [Tam]）流れる。

④動作を表すオノマトペによる椅子取りゲーム

例：スタスタ [Jpn]（パルパル [Tam]）歩くなど

⑤演奏者の音によるイメージ想起

三味線とタブラーが即興的に展開する音楽を聴き、参加者がそれぞれ想起したイメージを語り合った。音楽から生まれるイメージの共有により、コミュニケーションを深めた。



写真2 第3回WSの様子（進行1）



譜例1 第3回WSで創った旋律（第4回で伴奏を付けた）

■第4回WS [2024年12月7日(土),カフェfilament]

第3回で行った内容をさらに広い場所(写真3)で実施し進行を定着させ、最後に講師、ファシリテータ、インドルーツの方の参加者から次のようなフィードバックを受けた。

- ①遊びからことばの勉強もはじまるのではないかな? 特に子どもを対象とした日本語学習には、オノマトペを利用した音楽を利用することは有用だ。是非応用したい。毎月1回でもよいので、こうしたWSを継続したい。
- ②オノマトペを利用した音楽を創り共有する中で、両文化が双方向で交流できたのがよい。
- ③WSの開催曜日については、選択の判断は難しい。保護者は平日に仕事があるため夜も困難な場合が多く、また週末は家族やコミュニティでのイベントなどがある可能性がある。
- ④日本語教室で実施する文化紹介イベントに応用していく可能性はある。
- ⑤今回のWSはインドの言語だけではなく、中国語など、他の言語にも応用可能かもしれない。
- ⑥三味線とタブラーによる即興セッションからイメージを想起してオノマトペで表現することは興味深かった。大きな枠組みとしてゲーム性や、物語などを利用した音楽WSを継続して実施することで、両コミュニティの接触を確保し、さらに相互理解が可能になる。



写真3 第4回WSの様子

4 コミュニティミュージックについて

本事業基礎講座で扱われた「コミュニティミュージックとウェル・ビーイング」の関係(33-34頁)に照らせば、日本語学習音楽づくりWSを通じて日印両コミュニティの関係が良好になり、各自のQOLが上がるのが期待されます。課題は、今後の継続です。また、こうした取り組みをさらに広めるためには、コミュニティミュージックと学校教育課程との関係やコミュニティミュージックの類型(116-118頁)に照らし、どのような戦略を構築するかが問われることになるでしょう。

- 1) 本企画に関わっていただいた日本語教室および国際交流事業関係者の多くが、江戸川総合人生大学国際コミュニティ学科(学長:北野大博士)の卒業生です。社会人向け講座ですが、「ひとりでも多くの方が、学びの成果を地域に活かしていくことで、区民の活動に支えられる「ボランティア立区」の実現につなげていきます。」を、基本理念の柱としています。<https://www.sougou-jinsei-daigaku.net/pdf/admission-information2024.pdf> (2024-12-20)
- 2) 江戸川区. 2023. 1-11 国籍・地域別人口. <https://www.city.edogawa.tokyo.jp/documents/53011/01-11.xlsx> (2024-12-17)
江戸川区在住の国籍別人口統計(2023年1月1日現在)によれば、インドルーツの方々は、中国ルーツの方々(15,046人)に続き、6,116人。
- 3) 東京音楽大学文化庁補助事業アートマネジメント人材育成 Season2 令和6年度プログラム フィールドと地域をつなぐ https://www.tokyo-ondai.ac.jp/art_management/season2/2024/index.html (2024-12-17)

(小日向英俊)